

随想

日本体操・団体の金メダル獲得から感じたこと

「誰かのために一途に尽くす」という姿勢

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

八月二十三日のNHKテレビ放送《金メダル 知られざる戦い》内村航平と萩野康介》を見て現代社会と会社での人々の生きざまと対比して、大いに感じたことがある。とくにここで取り上げたいのは、体操団体におけるチームワークである。

オリンピック実況放送でも、内村航平選手が酷く疲れていることは見て取れた。得意の鉄棒で思いがけず落下したことからも、素人目でもわかる。予選六位通過で、著者は『金メダルは無理かな…』と思つたほどである。番組で明かされた内幕を知つて、心を動かされた。番組の初めに、内村が《予選の床運動で転倒する》というハプニングによって、彼の疲労から来る不

調を紹介するところから番組が始まる。「最近の内村さんを見ていると、疲れが取れ難くなっているよう」(加藤凌平)、「一人で六種目をこなすので、しんどかつたのでは…」(田中佑典)。メンバーは内村選手の疲れがピクに近いことを明かしている。

八月六日の団体予選での田中(鞍馬)と山室(跳馬)に続いて内村自身も絶対の自信を持つ鉄棒で落下する、という失敗を犯し追い込まれてしまう。この結果、予選を四位で通過。予選の点数は決勝に持ち越さないが、順位によって演技のオーダーが変わり、これが大きな負担になるという。日本チームが得意とする床運動の演技は着地回数が多く、選手の負担は大きい。こ

れが最初か最後かで、疲れが取れるレベルに大きな差がある。予選を一、二位で通過の場合には最初に床を演技できるが、四位の場合他の五種の演技を終えて疲労の蓄積した最後に床を演じなければならぬ。内村への負担が大きい課題となる。「鞍馬からのローテーションで体力のいる床を最後にこなさなければならぬことを考えるだけで怖くなって…」と内村選手がインタビューで語っている。

その夜、水鳥コーチは、演技ローテーションオーダーが変わつたことを踏まえて、内村選手の疲れを取るために、彼の床運動が最後にくるよう選手の演技順を入れ換えた。内村選手が六種目を演じることで完成するチー

ムであるから、順変更で他の選手への負担が増えても、それを乗り越えるしかない、というのが森泉代表コーチの考えである。加藤凌平「航平さんの負担を減らすためにもっともつとみんまで頑張ろう」

白井健三「みんながやりやすいようにやってみよう。誰かがそれに合わせるのが大事。全員が主張しあつていたら絶対まもらないと思う」

内村航平「僕の体力面を考慮して組んでくれていたので、余力を残しながらやってみよう。余力をつけてやろう」

体力に問題のある内村をチームがどう支えるかを問われる決勝が八月八日に行われた。第一ローテーションの鞍馬でこの種

目を得意としていた山室(光史)が思いがけない落下というミスを狙す。「自分に失望する。情けない」と謝る山室に対して内村は『全然大丈夫』という表情でタッチした。

六位に沈んだチームを引き上げようと、第二ローテーションのつり輪で内村が見せる。疲れを見せずにノミミスでこれを楽しみ切った。次は跳馬。ロンドンオリンピックの内村の金メダルを見て、内村と金メダルを取りたいと願った十九才の白井がユルチェンコという大技で一点六台を出して三種目を終えて日本は二位に上げている。

後半ローテーション、平行棒の第一演者、田中は昨年世界選手権の鉄棒、平行棒で落下し、自信を喪失して内村に「自分を必要としてくれますか？」と問いかけたことがある。「佑典の平行棒、鉄棒がなければ絶対金は取れない、と思っていた。心細くなっているトーンだったので、当たり前だろ！ という気持ちで答えた」と内村。この言

葉を支えに、田中は一点に近い完璧な演技を示す。続く加藤もミスのない演技で一五・六点を上げて流れを決める。

しかし、この時点で内村の疲労は限界に達しようとしていた。疲れが演技に表れ、チームの足を引く張る結果となった。その時に見せた内村選手の表情はいつもの強気の顔ではなく、不安と焦燥を内に秘めた、これまでにない目をしていった(と著者には見えた)。次の鉄棒演技でも、体の疲労から本来の技を演じきれない内村は、本来最も得意とするこの演技で一五・一六という期待を大きく下回る点数に終わる。

これをカバーする大役が田中にかかってきた。田中は予選ではこれまでの失敗からのトラウマでF難度《コールマン》を避けて演技していた。この時点でロシア一位、一四・九五八点差で二位の日本は田中の演技次第で逆転も可能である。この裏話を語る田中はインタビュで言葉を詰まらせ、水を飲む。『弱

気な自分を越えるためにもコールマンを決めてやろう!』。この好演技で日本は一位となる。

最終ローテーションの床で最初の演技は十九才の白井。自らの名前が付いた技を決めて、一六・一三三。金メダルバトンは内村へ引き継がれた。内村の極度の疲労は全メンバーに伝わっていたが、それでも彼への信頼は揺るがなかった。

最終演技で金メダルを決めた内村選手は、自身が満足できる演技ではなかったが素晴らしい笑顔を見せ、田中は第一に内村に抱きつき、山室は涙を流す。結局、内村航平選手を支えて金メダルを目指したチームは、最高得点で目的を達した。

オリンピックでは、体操に限らず感動に涙することが多かったが、内村選手を守り立てようとする、団体メンバーの克己心に改めて、思いを深めた。

最近の社会の現実を対比する時、このメンバーの心意気は著者の若い時代を彷彿とさせる。業界の実態を踏まえて、会社の

行く末を語る時いつも大きなテーマとなるのは、スタップの生きざまと、業務との兼ね合い(バランス)である。かつて、

著者の青年期には、心を預けるに足る人に、すべてを託す思いでその「時」を預けたものである。そこには、露骨な損得勘定はなかった。近頃では、権利意識が強く、また各種のハラスメントを被害者の立場で言い立てる事例も枚挙に暇がない。働く人々だけでなく、経営者のマイナドも、利益ありき、の自己中心が当たり前となりつつある。いつの間にか、誰かのために一途に尽くす、という姿勢は時代遅れにも受け取られる気風となつてしまっている。

今回心を動かされた、体操団体のメンバーのひた向きの態度は、日常では失われている美德とも感じられた。『このような若者たちの心意気をどのようにして社会全体に反映したものでろうか!!』感涙を流しながら、そう感じたのはわれわれの世代だけだろうか。